View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

『ウォークス――歩くことの精神史』

レベッカ・ソルニット［著］，東辻賢治郎［訳］，2017年，左右社．

［評者］
寺門信
TERAKADO Shin

人間には日常のなかで必ず行っている振る舞いがいくつかある．そのなかのひとつが，歩くことだ．電車や自動車などの交通手段が発達している昨今，都市生活者ほど歩く機会は減っているものの，それでも日々のなかで歩いている瞬間はかならずある．それではその日常的な振る舞いをわたしたちはどのように言葉にしているかというと，科学的な観点から1日にこれぐらいは歩いた方がいいなどといった形で，健康とむすびつけていることが多いように思う．睡眠や食事などもそのように扱われることが多い．一方で，そのような行為を文化的なものとして語る方法もある．睡眠に関しては，『睡眠文化を学ぶ人のために』（世界思想社）といった本があるし，食事に関しては食文化といった言葉があることからもわかるように，睡眠・食事は文化的な営みとしてある程度論じられているようだ．それなら，歩くことに関してもそのように語ることや論じることはできるはずである．

まさにその歩行，歩くことを人間の歴史におけるひとつの文化として論じようとしたのが，レベッカ・ソルニット『ウォークス――歩くことの精神史』である．著者のソルニットは，作家，歴史家，アクティヴィストといった肩書きを持ち，環境，芸術，アメリカ史など他分野に渡る著作がある．本書のなかで彼女は，歩くことは「限られた専門家ではなく無数のアマチュアの領分である」という．ここで述べられたスタンスを体現するかのように，本書の中でソルニットは，著名な人物が残した記述だけを特権化して論じるようなことはしない．彼女は歩くことを考えるうえで，ヘンリー・デイヴィッド・ソローやジャン＝ジャック・ルソー，セーレン・キェルケゴールなどの先人が残した記録と，彼女自身が歩き経験した出来事や見た景色の描写，さらには彼女の友人から聞いた体験談などを，すべて平等に扱ったうえで論を進めていく．

本書は大きく4つのパートに分けられている．第1部前半で語られるのは，歩くことを文化として考えた先人たちについてである．さまざまな人名が引き合いに出される中で，特に焦点をあてられているのがルソーだ．ソルニットは，『告白』や『孤独な散歩者の夢想』といったルソーの著作

から引用をしつつ，「歩く，ということを特別な存在に押し上げる理念的な枠組みの土台を据えたのはルソーだった」と述べる．そこから考察はさらに時代を遡り，よりプリミティブな状態の歩行を問題にしていく．具体的には，進化の過程における二足歩行の獲得が人間にとってどのような意味を持っていたか，宗教的な巡礼と歩くという行為はどのように結びついているのか，などの問題が考察される．

第1部の中心人物がルソーであったとすれば，第２部で中心となるのはウィリアム・ワーズワースだ．ワーズワースの歩行が革新的であったのは，ありのままの自然のなかを歩行し，記述を行った点である．〈ありのまま〉という言葉が何を指すのかは往々にして物議をかもすが，ここでいうありのままの自然というフレーズが意味するのは，自然には台風や津波のような荒々しい側面，すなわち人間に対してかならずしも優しくはない側面もあるという意味である．人間が愛好するような〈自然〉のイメージは18世紀に形作られた．18世紀に自然が鑑賞の対象として発見され，その後人間が望ましいとしている〈自然〉観が世界に対して押し付けられていくさまが，第2部を通じて描かれていく．

第3部では，まさに現代の産業化社会の基盤となったような，都市が発生してきた時代に，歩くことがどのように位置づけられていったのかが論じられる．ここでソルニットが重視しているのが，第11章で述べられているような，初期の都市が持つある種の雑多さである．そのような観点は，ヴァルター・ベンヤミンがパリでみたパサージュや，デモの行進を例示することにも通底している．しかし，彼女は初期の都市が持つ要素を無批判に肯定するわけではない．ベンヤミンのいうフラヌール（遊歩者）が基本的には男性をモデルとしていたように，都市のストリートにおける公共性から女性は疎外されていた．その現実を描いた点において，第14章は欠かせない部分である．

そして第4部．「道の果てる先に」というタイトルで暗示されているように，ここでソルニットは，現代では「歩行の黄金時代」がすでに終わりを迎えているのではないかと問いかける．本書で例としてあげられているのはアメリカの街であるが，東京に住む人が読んでもその内容はきわめてアクチュアルだ．18世紀から始まった「歩くことの黄金時代」において，歩行は単なる運動という以上に，未知のものに偶発的に出会うという点で重要だった．しかし，現代において歩行（あるいはランニング）は，環境の整ったトレーニングジムや，決まったルートを巡回するような形に押し込まれている．そこにはかつての歩行が含んでいた豊かさはない．

しかしそのような現代において，ソルニットはラスベガスを論じることで希望を見出そうとする．ラスベガスにはラスベガス・ストリップと呼ば

れる界隈があるが，ソルニットいわく，ここ数年でその辺りは「歩行者の新しい前哨基地」へと変化している．というのも，ラスベガスへ観光に向かう人びとの多くが車を使うために恒常的な渋滞が発生し，その結果，年間3千万人あまりの観光客が車を降りて街を散策するようになったからだ． ソルニットはそこを，「もろもろの自由が実践される公共の空間」とみなしている．だがそこでは同時に，カジノや行政によって歩道に対する規制がしかれ，歩行者の自由が蝕まれようともしている．「その想像力の草原をアスファルトで覆ってしまうのか，あるいはひろがるままにまかせておくのか，ラスベガスはまだ決断していない」（p. 488.）のである．

最後に，ソルニットは以下のように述べて本書を締めくくる．

「星座とは自然の現象ではなく，そこに重ねられた文化だ．そして星々をつなぐ線は，過去に人びとがたどりその想像力が踏み均してきた道に似ている．その歩行と呼ばれる星座には歴史がある．すべての詩人，哲学者，謀叛人たちが歩み，赤信号を渡る人，娼婦，巡礼者，観光客，ハイカー，登山家が踏みしめた歴史だ．そこに前途があるか否か．それは，この星々をつなぐ道に続く者があるか否かにかかっている」（p. 490.）．

歩くことの未来は，それをわたしたちがいかに実践するのかということにかかっている．

近年，スローライフといった言葉が都市型の生活に対するカウンターとして位置づけられているが，ソルニットは，そのようなユートピア的自然観もまた文化的な構築物であることを明らかにする．おそらくソルニットが大事にしているのは，そのような〈自然〉へと回帰することではなく，かつての都市が持っていた，市民が歩くという行為を通して公共性が立ち上がってくるような場をいかに再構築するかということである．思えば，『ウォークス』の原題は *Wanderlust* という．Wanderは「歩く」という意味も含んでいるが，その歩きは「さまよう」や「ふらつく」といった意味合いが強い．そのため，「さまようことへの欲望」とでも訳せるそのタイトルもまた，雑多なストリートの公共性を肯定的に捉えるソルニットの思考を反映したものだと言えるだろう．

Copyright © The Comparative Civilizations Society of Rikkyo University